

《もくじ》

■特集:なぜ、日本初の「荒瀬ダム撤去」が実現したのか  
 2頁・地元住民の自発的な集団を「核」にダム撤去の運動～甞る清流球磨川の現場から……木本 生光(荒瀬ダムを考える会)  
 7頁・サケの群れが回帰する千曲川を取り戻そう～流域振興と自然再生をめざして……市川 久芳(正会員)  
 8頁・ご一緒に活動しませんか!

# 奔流

《第14号》

■発行  
 千曲川・信濃川復権の会  
 〒184-0012  
 東京都小金井市中町2-5-13  
 FAX・TEL 042-381-7770  
 ■発行人・根津 東六(共同代表)  
 ■編集人・矢間秀次郎(共同代表)  
 ■〒振替・00120-0-710488

題字揮毫・梅原猛

大河の一滴 (14)

## 「ダム撤去の時代」をひらく河川行政の試金石

―荒瀬ダムで日本初の撤去工事が進行中―

つる 詳子(「豊かな球磨川をとりもどす会」事務局長)

戦後の電力不足を補うため、球磨川電源総合開発計画が本流支流に7つのダムを造ることで、1948(昭和23)年スタートした。当時の桜井三郎知事の大

義名分は、「県民の福祉増進」、「県内の工業振興」で、取り組んだのが県営の荒瀬ダム(八代市坂本町＝旧坂本村)である。1953年に着工し、わずか1年10ヶ月で完成、1955年から運用された。

荒瀬ダムについて、桜井知事は、「熊本県百年の大計はまさにこの一事にあり」と言い、「私達の郷土にやがて生まれ来るであろう私達の子孫のために、これより残すべき大なる遺産がありますまい」と言及した。地元説明には、「観光で潤う」「電気代がタタになる」「洪水もなくなる」と美辞麗句が並ぶ。戦後復興への熱気が盛んな時代で、お国のいうことには逆らえず、本流を堰止める巨大ダムがなんたるかも分らないまま、多くの



住民はその説明を信じる他はなかった。しかし、荒瀬ダム竣工から「ダムの怖さ」を知るには、そう時間はかからなかった。ダムサイトに近い集落に放流時の振動被害がでる。洪水はあつても被害が少なかった沿川に甚大な洪水被害が起る。舟運とアユ漁で支えられてきた地域の産業は衰退の一途を辿った。何度も村奥に被害を訴えてきたが取り上げられることはなかった。運動が盛り上がったのは、同じ球磨川水系に計画された川辺川ダム反対の住民運動と連動した結果である。「私達は50年以上も我慢してきた。もう、私達に球磨川を返してくれ!」という地元住民の願いが坂本村や熊本県を動かし、撤去が決定したのは2004年のことであった。

2012年から撤去工事が開始され、現在、8基あったゲートと門柱2本が撤去され、水位低下設備により水位が下がり、ダム湖の面影はどこにもない。ほとんどの瀬が復活し、水は音を立てて流れ、臭いを放っていた泥河原は砂礫の河原に戻った。砂が増えたのは河口干潟も

同様である。砂地を好むカニや貝類が増え、アマモ場も確実に増殖して、そこに産卵しに来るイカや休憩しに来るウナギも増えた。休日になると、アナジャコ捕りを楽しむ人の姿もどっと増えた。また、魚や土砂の移動を妨げている発電専用の瀬戸石ダムが上流10kmには鎮座している。今、下流に補給されている土砂は、50年間に貯められた荒瀬ダム湖の堆積物ではない。瀬戸石ダムがある限り、上流からの栄養塩や土砂は下流には届かず、ダム撤去の効果は、限定的であろう。

アメリカでは1990年代に内務省開拓局長官であったダニエルピアードが「ダム建設の時代は終わった」と発言し、実際これまでに1000を超えるダムや堰が撤去されている。つい最近撤去が終了したエルワ川の2つの大型ダムでは、1年も経たないうちにサケが上流で産卵を始めた。豊かな環境を取り戻したいという想いが浸透しつつある。

それに比べて、日本は相変わらず、無駄なダム建設を強引に地元に残しているではないか。ここ荒瀬ダムの撤去の現場では、事業者である県及び工事業者と住民の間に何の垣根も対立もない。撤去工法や検証結果は公開されている。住民のためになる公共事業のあり方をここでは見ることができ、皆が誇らしげである。日本再生の試金石になるだろう。